



文化庁委託事業

平成 31 年度 劇場・音楽堂等基盤整備事業

# 「劇場・音楽堂等スタッフ交流研修事業」 報告書

公益社団法人全国公立文化施設協会

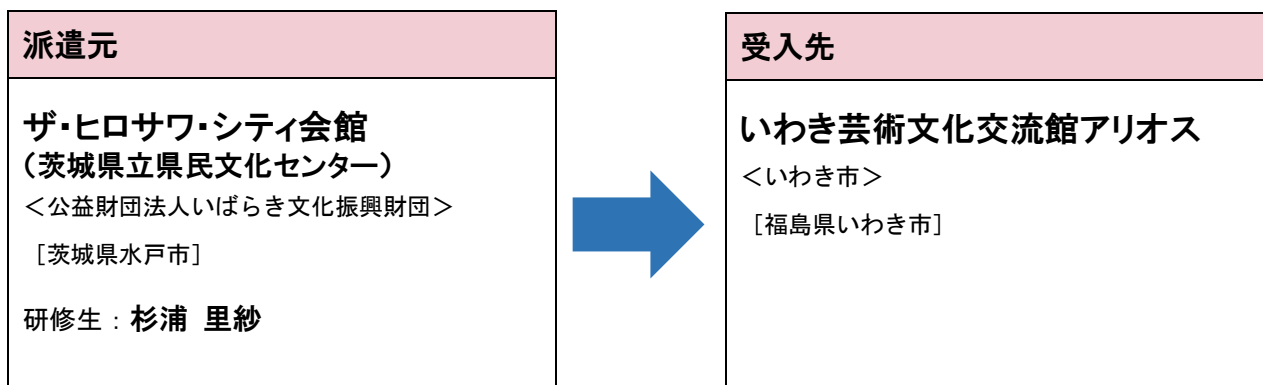
文化庁委託事業 平成 31 年度 劇場・音楽堂等基盤整備事業

「劇場・音楽堂等スタッフ交流研修事業」報告書

目 次

<派遣元>	ザ・ヒロサワ・シティ会館（茨城県立県民文化センター）	
<受入先>	いわき芸術文化交流館アリオス	3
<派遣元>	武豊町民会館	
<受入先>	兵庫県立芸術文化センター	7

## スタッフ交流研修事業（派遣研修） 報告



### 研修期間

令和元年 9 月 22 日（日） ～ 令和元年 10 月 10 日（木）のうち 計 10 日間

### 研修概要

この研修では3つのジャンルのアウトリーチ・市民参加型事業の業務へ参加し、場所やシチュエーションの枠にとらわれないホール外での多様な事業の組み立て方を学び、地域の特色や会館の独自性を持ったアウトリーチ事業を企画できるような発想力を培う。

また、講師・アーティストや派遣先、参加者と会館職員のやりとりを間近で拝見することで、内容（プログラムや指導事項など）の調整に係るマネジメントのあり方を学ぶ。

### 日程・実施内容

実施日	内容
9月22日	リージョナル・シアター2019 いわきアリオス演劇部
9月23日	リージョナル・シアター2019 いわきアリオス演劇部
9月24日	事業レクチャー受講、アウトリーチ打ち合わせ等
9月25日	身体表現のアウトリーチ／ダンス採集
9月26日	身体表現のアウトリーチ／ダンス採集
9月27日	身体表現のアウトリーチ／ダンス採集
10月7日	地元演奏家によるアウトリーチランスルー
10月8日	地元演奏家によるアウトリーチ

10月9日	地元演奏家によるアウトリーチ
10月10日	地元演奏家によるアウトリーチ

## 研修生の所感

---

研修生氏名： 杉浦 里紗

### ■研修の目的

今回の研修では、音楽・美術・ダンス表現などのジャンル問わず、地域の特色を活かし積極的に様々なアウトリーチ事業や市民参加型事業の企画・運営を実施しているいわきアリオスの事業の組み立て方、実際の運営方法を学ぶことが目的である。

### ■研修の内容

#### ●リージョナル・シアター2019 いわきアリオス演劇部(市民参加型事業)

令和2年3月まで継続的に行われる市民(高校生)参加型事業の初回～2回目に参加。いわき市内の演劇に興味のある高校生34名が集まり、台本制作から当日までの仕込み・上演までを行う。講師であるアーティスト(作・演出家)2名が各グループの台本作成・演技を指導し、併せて演出も行う。今回は高校生たちの顔合わせ、アイスブレイク、グループワークなど高校生たちの活動と内部打ち合わせなどのやりとりを見学させていただいた。

#### ●おでかけアリオス コンテンポラリーダンスユニット“んまつーぽす”による学校へのアウトリーチ事業

宮崎県を拠点に国際的に活躍するコンテンポラリーダンスユニット“んまつーぽす”のアウトリーチ事業。身体表現を主としたワークショップ(小学校4校での実施)を見学・運営補助を行った。併せて、今後のプログラムの内容検討の会議に参加させていただいた。

#### ●“んまつーぽす”による映像作品制作「ダンス採集」(市民参加型事業)

温泉街であるいわき湯本の商店街で働く人々の手仕事をクローズアップした映像を撮影、併せて“んまつーぽす”が店内でその手仕事・所作からインスピレーションを受けたダンスを表現、各店舗の手仕事をんまつーぽすの表現を用いてつなぎ合わせていくという映像作品を制作する市民参加型事業「ダンス採集」の撮影現場に立ち合わせていただき、また会館職員とアーティスト、映像作家の三者による打ち合わせに参加させていただいた。

#### ●おでかけアリオス 地元演奏家“木田麻貴”氏による学校へのアウトリーチ事業

いわき市出身の演奏家“木田麻貴”氏による学校へのアウトリーチ事業であるピアノコンサート(小・中学校5校での実施)の見学・運営補助をおこなった。本番日前日にはランス

ルーにも参加させていただき、会館職員としてのアーティストとの関わり方、学校の先生とのやりとりを学ばせていただいた。

## ■この研修で得られた成果

今回の研修では、演劇、ダンス、音楽と様々なジャンルのアウトリーチ事業、市民参加型事業の運営モデルを間近で体感することができ、大変貴重な経験をさせていただいた。アリオスと自館のアウトリーチ事業を比較すると、アーティストの選出方法、スケジュールの調整方法、プログラムの組み立て方や当日の運営方法など全体を通して大きく異なっており、参考にすべきところがたくさんあった。ひとつの大きな違いとして挙げられる事項は、音楽アウトリーチに係るランスルーの実施であり、派遣先の対象者に向けてどのような目的をもって披露するのか、鑑賞者に何を感じさせるのかを、アーティストと会館職員の意識を共有し相互理解を深め、プログラムの内容を充実させるために尽力する両者の姿に大変感銘を受けた。また、アーティストへのケアにも大変力を入れており、講座が終了する度に、講座のよかったところや演奏面についての専門的な指導、加えて改善した方がいいところなどを職員がアドバイスしており、アーティストの立場に寄り添い気遣う場面が多く見受けられ、アーティストに対する接し方の参考となった。また、アリオスは派遣先である学校には必ず事前打ち合わせに赴き、派遣先とアーティストの双方の不安を取り除くために、アウトリーチ先がどのような地域にあるか、実際に演奏する空間はどのような場所なのか、派遣先が学校であれば、子どもたちの普段の生活の様子や芸術文化にどれだけ関心があるかなどを学校側から聞き取りを行い、あらかじめアーティストとその情報を共有することで、プログラムの内容検討に役立たせることに繋げていた。

市民参加型事業については、職員とアーティスト、参加者との関わり方について大変参考になった。地域市民の方々の協力のもとで制作が行われるダンス採集の撮影においては、参加する市民の方々を尊重し、無理に何かを演じさせようとするのではなく、自然な表情や所作を引き出すため、そのお店や店主の醸し出す雰囲気や壊さないように撮影することを意識したアーティスト・会館職員と撮影に協力的に参加する市民の方々との交流が印象的であった。

今回見学させていただいた事業全てにおいて、会館職員と講師であるアーティストとの打ち合わせや会議を数多く重ね、目指す目標へ妥協せず、派遣先・参加者へより良い事業を提供するために、徹底的に話し合うことのできる関係性を築いている。お互いリスペクトし合える信頼関係を構築し、双方一体となって地域への芸術文化の振興に力を入れている取り組み・姿勢は参考にすべきモデルであると感じた。

## ■研修で得た成果をどのように活かしていくか

今回の研修では、より良い事業を実施するために職員とアーティストの互いの信頼関係を築くことの大切さを学んだ。アリオスの会館職員とアーティストとの数多くの綿密な打ち合わせのなかで、会館が目的としていることとアーティストが目指す表現・意識とを近づけるために

徹底的に話し合う姿勢が強く印象に残っている。アーティストとの更なる信頼関係を構築するためには、自館がアーティストにとって頼りがいのあり価値ある存在であることが必要だと感じる。そのためにはアーティストに寄り添ったマネジメントを行うことが重要であると考え、若手アーティストへの更なるサポートの充実、また演奏機会をより多く提供するとともに、地域の方々にとっても芸術文化に触れる機会が増えることで、芸術文化の普及への相乗効果を働きかけられるようになることが理想である。地域の人々により身近に芸術文化を感じてもらう機会を、会館側から赴いて提供することは、芸術文化を振興・普及するため公立文化施設の職員としての重要な指名であると感じている。アリオスではアウトリーチ事業担当職員と各ジャンルの専門的知識を有する職員が一丸となって事業を運営しており、プログラムの内容の充実度を深めていた。アリオスの運営方法をそっくり全て倣うことは難しいが、自館のアウトリーチ事業をとりまく環境や事情・目的のなかでできることを参考にしていきたい。

また自館において、市民参加型の事業については単発的に実施することはあっても、長期的に協同で何かを制作したり運営したりする事業はあまり数多くない。参加型事業は鑑賞することとは違った感性で芸術文化に触れることができると考える。これは芸術文化の振興には欠かせないひとつの要素であると感じており、率先して地域の方々と通年もしくは長期的に関わる事業の企画を立案していきたいと思う。

今回の研修で学んだことを自分自身の今後の業務において最大限に活かし、アーティストと地域・学校（派遣先）との架け橋となり各アーティスト活躍の場・可能性を広げ、また地域の芸術文化の振興を図ることを目標に、今後の事業企画・運営に役立てていきたい。

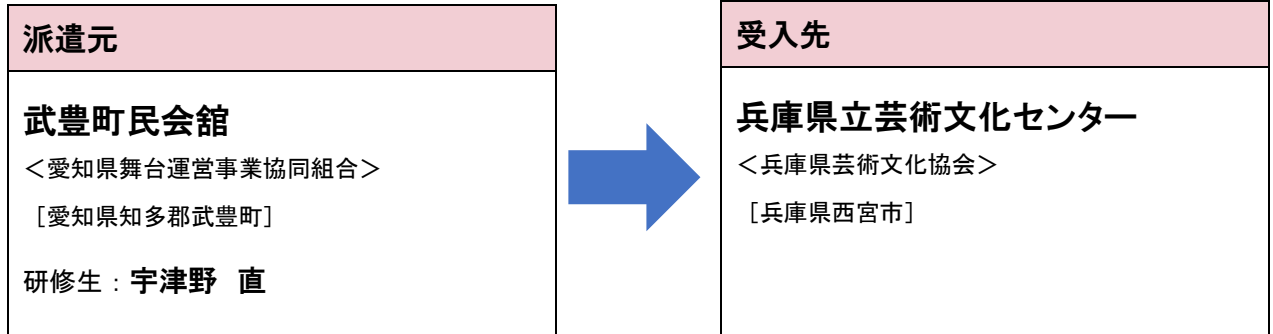
## 受入施設より

---

### いわき芸術文化交流館アリオス 矢吹 修一

派遣元財団と当館とのおかれている公共ホールの役割・目的が異なる点があることを、研修を行う中でお互いに理解することができた。その上で、当館の事業で大切にしている、実演家や事業対象者である市民との関わり方、アウトリーチ等の受け入れ先の機関との連携・協同の築き方など、相互関係の中で進めている事業を実際に制作補助という立ち位置で経験していただいた。

今回の研修の目的の一つでもあった事業内容に関わる劇場スタッフのマネジメントの在り方など、実体験を通じて、意欲的に吸収しようとする姿は好印象であり、今後のご活躍にも期待をしています。



## 研修期間

令和元年 9 月 20 日（金） ～ 令和元年 9 月 27 日（金）のうち 計 6 日間

## 研修概要

### （1）先進的な音響設備導入の意義

音声を拡声することは、「音源と拡声する音を音量や音質などでどのように伝えるか」である。

その時に必要なのが、マイクロフォンや各種再生機から音響調整卓を通じて拡声する電気的な音声と客席に直接伝わる音声を、どのようにミックスしていくかを考えることが重要です。その為の作業の方法も日々進化しています。核となる音響調整卓の操作性はもちろん合理的かつ安全な運営も踏まえて、新しい技術を備えた様々な機材を活用することで演者の表現がお客様へより上手く伝えることができます。

### （2）機材選定の重要性

音声は、劇場によって固有な伝わり方をします。空間に音声を出した時の伝わり方や広がり方を考える時は、音源や目的に合ったマイクロフォンを選定し、使用する場所や音量に合ったスピーカーや様々な音声信号をミックスする音響調整卓等を条件に合わせて選定しなければ、演者が意図する音声表現が出来ません。

又、音声を伝送する方法では、近年ではデジタル伝送が主流です。従来のアナログ伝送と比較し、デジタル伝送では効率的に多くの信号を同時に処理することが出来、伝送による劣化が無く、正確な伝送が可能となります。但し、伝送する為の機器の組合せによっては、デジタル信号が途切れ、音声が聞こえなくなることもあります。

この様な伝送システムを構築する為には豊富な経験と知識が必要です。

### (3) 先進機材の導入と運営

デジタル機器の運用は、多くの人が携わる劇場の場合、規則とバックアップが必要です。

- (イ)【規則】操作基準の明確化 / 操作範囲の策定
- (ロ)【周知】組織内に伝わるよう明文化
- (ハ)【伝える】操作方法や操作範囲を伝えるための研修の実施
- (ニ)【確認】作業者に終了後の聞き取りもしくは記述による報告の実施

### (4) 機材運用

導入後は作業者とのPDCAによる運用、そして催事全体からの評価の確認も重要。

## 日程・実施内容

実施日	内容
9月20日	ピッコロ舞台技術学校 発表会（大ホール）音響業務対応 淡路人形浄瑠璃特別公演 準備（中ホール）音響業務対応
9月21日	淡路人形浄瑠璃特別公演（中ホール）音響業務対応の補佐
9月22日	アルカディア特別演奏会（小ホール）音響業務対応
9月25日	なるほど「阪急 中ホール」編（中ホール）音響業務対応の補佐 An Evening of Art Songs（小ホール）音響業務対応
9月26日	氏家美紀ソプラノ・リサイタル（小ホール）音響業務対応 古代ミュージカルロマン 天日槍物語 準備（中ホール）音響業務対応の補佐 栗木充代 メゾ・ソプラノ リサイタル（小ホール）音響業務対応
9月27日	バレエ・アム・ライン マーティン・シュレップァー演出《白鳥の湖》 準備・リハーサル 音響業務対応

## 研修生の所感

研修生氏名：宇津野 直

### ■研修の目的

知識や技術の向上と大劇場でのスタッフ間の連携や他のセクションとの連携を学ぶ。

### ■研修の内容

今回の研修では、さまざまな目的の催事に係ることが出来、大変有意義なものになりました。



声楽、演劇、ミュージカル、古典芸能、大劇場でオーケストラピットでの生演奏によるバレエなど日頃務める会館では体験できない演目に音響業務対応の補佐や立合いを行いました。

## ■この研修で得られた成果

小ホールでは、コンサートホール特有のスピーカーから出力される音の聞こえ方や扉で隔たれた舞台袖での音量確認や音響システムの運用について学びました。

中ホールでは、ミキサーやスピーカーなど先進的なシステムの説明や音響機材のスタッフ間運用について学びました。

大ホールでは、大規模な劇場で使われる音響機材の特性やシステムの構成について教えていただきました。そして多数の劇場スタッフ間の連携や役割などを学びました。

この期間に音響業務従事者からは、音響機材の運用方法と他セクションとの連携を実際に見聞きすることが出来ました。

## ■研修で得た成果をどのように活かしていくか

今回の研修で得られました経験を、今後検討される武豊町民会館の設備更新や舞台管理運営業務の参考にさせていただきます。

また所属している愛知県舞台運営事業協同組合で定期的に行っている組合所属技術者向けの講習会で、音響機材・システム構成の説明や劇場スタッフ間の連携方法などをプレゼンテーションしたいと思います。

## 受入施設より

---

### 兵庫県立芸術文化センター 金子 彰宏

研修生は、研修目的のため、貪欲に積極的に参加していた。こちらが研修としてのサポートが十分にできない場面でも、自分なりに見聞きし、解説し、吸収していたように感じた。研修態度は至って真面目で、こちらが助けていただいた場面も多かった。

会場の違い、演目の違いを体験し、常に興味を持って参加され、意見交換ができたことで、こちらが学ばせていただくところも多かった。当館のスタッフにとっても良い刺激になったと感じる。

既に多くの経験をされている方の研修とあって、よりレベルの高い有意義な研修となったのではないだろうか。そしてさらに多くの若いスタッフに継承していく連鎖ができ、人材の底上げとなってくれば嬉しいかぎりである。